

[日時]

2017年7月7日(金)

[司会・進行]

槻橋修(准教授)

[担当学生]

大崎真幸 小林諒 佐野旭 田川美那海 中井修二 東美弦 松井智美

松田星斗 山本雅則 山本修大(M1)

中島安奈 松井優香(B3)

『状況』を建築する

遠藤 克彦 建築家 / 遠藤克彦建築研究所

講演概要

タイトルの「『状況』を建築する」は遠藤氏のこれまでの建築活動を振り返り、今の建築に対する考えをまとめたタイトルである。建築をものとして捉えるのではなく、経済、社会という大きな枠の中でどう捉えるのか。物を作り、建物を建て、人が住むだけではなく、経済活動などの影響を含めた全体的なことを捉えた言葉が現代にはない。建築だけではなく、その周辺環境までも設計することが現代社会には求められる。それが「状況を建築する」である。

遠藤氏は2016年8月、新大阪美術館のコンペにおいて見事に最優秀賞を獲得した。遠藤氏のコンペに対する姿勢は、どのコンペもどのように準備していくかが重要である。建築は時間がかかるものであり、その設計にたどり着くまでも時間がかかる。未来に向けてどう準備して行くか、見えないものに対してどう準備して行くかが重要であると遠藤氏は言う。また多くのコンペや実施設計をこなす中で遠藤氏はあることに気づく。それは建築が大きくても小さくても変わらないもの、つまり手法があるのではないかと。新大阪美術館においては、遠藤氏が設計した美山の家からその手法が適用されている。その美山の家テーマは「開かれた場所と閉じられた場所」であり、その形態と外観、テーマが新大阪美術館に応用されている。それが遠藤氏の言う手法の適用である。手法が何であるかを見つけ出し、またそのリサーチした手法をどう街に適用して行くかに興味があると遠藤氏は言う。

新大阪新美術館のコンペでは、敷地調査から始まり、約40個のスタディをインターンの学生と共にに行った。その40個のスタ

ディから答えを見つけ出し、形を次第に明確化する。このスタディは遠藤氏の一つの手法であり、複数の解答から確実に不正解な解答を徐々に省き、この敷地での正解となる建築へ近づけていく手法である。またこの手法では一つの敷地に複数のパターンがあるため、あらゆる可能性が生まれ、新しい建築の可能性が含まれている。

また周辺敷地において終始変わらなかったことが、敷地の西側であった。将来、何が建つか分からない状況で、これに対してどう準備するかがとても重要であり、特に都市の中で建物を作る場合、隣地は選べない。また師である原広司先生は「見通せない未来をどう見通すか」と話していたと言う。都市は分からないものであり、都市は見通せないものだと自覚を持っておくことが重要であると遠藤氏は言う。こういった周辺敷地のリサーチ状況からこの建築は周囲に対して開き、接続可能な状況を設計するという回答を選んだ。

遠藤氏は今回の講演においていくつかの建築を紹介し、それらのコンセプトなどを話したが、どの建築のコンセプトにおいても人のアクティビティというフレーズが共通して見つけられた。遠藤氏は建築において主は人であると言う。このコンセプトは遠藤氏のどの建築においても繋がりが続いている。建築空間を作る上での手法も進化し続け、それは過去の建築作品と繋がっていることが遠藤氏の建築の中から見えてくる。遠藤氏は学生時代からの活動と今の活動においてもずっと繋がっていて、また今と将来も繋がっていると強く学生達にメッセージを発信した。このことは学生達に対して将来何をしたいのかと考えた時、今、何をしているのかがすごく重要であるということを訴えている。



遠藤 克彦 | Katsuhiko Endo

建築家 / 遠藤克彦建築研究所

1970年横浜市生まれ。1995年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了(原広司研究室在籍)。1997年遠藤建築研究所設立(現株式会社遠藤克彦建築研究所)。2015年より日本大学理工学部建築学科非常勤講師。

設計事務所では住宅から公共建築、そして街づくり提案まで多岐に渡るプロジェクトを手掛けており、数々の賞を受賞している。

2017年2月の(仮称)大阪新美術館公募型設計競技にて最優秀案に選定され、大阪オフィスを開設して基本設計が進行中。

私たち第41回神戸建築学実行委員会は、講演会の2ヶ月ほど前から遠藤克彦さんの事前学習を進めてきました。その中で学んだものと、講演会の内容をリンクさせながら、遠藤氏の建築に対する手法や考え方に対して私たちが考えたことを今回、大崎がまとめ、述べさせていただきます。

今回の講演では、大学生に対して強いメッセージが込められているように私は感じました。例えば、講演会の内容にあった60個以上に渡るコンペやプロポーザルをやってきたというのは、設計ができる力を身につけるためであり、敷地を見て案を考え設計するというトレーニングを積んでいくという内容でした。これは設計の基礎的な部分をしっかりと一から学び直している姿勢が見られ、私たちにも常に設計において基礎からのトレーニングの必要性を感じました。また私たちが課題等で設計する際においても共通して考えていることや、好みのデザインなどは数を通して気づく点があり、それがいわゆる遠藤氏の手法というものに近い物と考えられ、スタディの事とも共通点があるように思いました。膨大なスタディを行うことで何が誤りで何が良いかを気づくようになるといったことでした。この内容は学生の僕たちにとってもスタディの重要性を気づかせた重要な話であったと思います。

また大阪新美術館のコンペにおいて、敷地調査に行かれた話では、敷地の重要性についてお話されました。敷地で何を見つけ、何を持って帰って来るかが重要であり、それが構想の根元になるとお話しされ、建築を設計する上での基礎的な部分である敷地の重要性を再認識することとなりました。

この話は質疑応答の時間にも場所性と言う言葉で質問がありました。敷地と場所性と言う言葉はどちらも似た意味合いである時とそうではない時があるように思えます。それはある場所や時代において、言葉の意味の解釈が変わる場合があるからです。遠藤氏はこの場所性において「場所性は現代において建築家が考えるべき宿命である。土地は動かないが、建築家は常に動いている。建築家が持つ時代性や背景などといった手法が持ち込まれ、建築に投影される。」と答えておられました。敷地というキーワード



に対しては、建築家は敷地に対し、どの時代においてもクリアな回答を示していると思われませんが、場所性は時代によってそれが考慮されたり、あまり考慮されていなかったりということがあるように思えます。それはモダニズムであったり、ポストモダンといった時代が建築と場所性の関係を示しています。これからの未来はかつてのモダニズムと類似してAI等による機械主義的な建築が作られると仮定した場合、場所性の持つ建築というものがモダニズムの時同様に失われていくのかもしれない。現代建築と新技術がうまく融合した建築が生まれることは良いと思いますが、建築と場所性がうまく融合した建築がそれによって消滅することなく、うまく共存していくことが文化の存続であったり、記憶を通して人と場所が繋がるためにも重要ではないかと思えます。

最後に遠藤氏は学生に対して「今やっていること、将来のやっていることは必ず繋がっている」とお話しされ、この内容は遠藤氏自身が学生時代と今やっていることに大きな違いはなく、常にリンクしているということでした。それらは大学時代の経験が社会人になっての活動の土台や、理論の根本になっているということをお話しされ、私たちに伝えてくれているような気がしました。私たち自身も今考えていること、やっていることは無駄にはならず、将来の答えを探すためにとても重要なスタディであると思います。遠藤氏の建築を作る手法であるスタディはまさに私たちの生きる上においても重要な考え方であると思いました。(大崎真幸)

